

国際芥川龍之介学会 ISAS 第2回研究集会 印象記

安藤公美

第2回研究集会は、2021年3月13日(土)午後1時から5時半まで、ZOOMを使用してのオンライン開催となり、国や地域を超えて50名を超える参加があった。

一番手として登壇された落合修平氏は、「芥川龍之介晩期文芸観の研究一意図・推論・全集の外一」をテーマに、芥川後期の〈詩的精神〉を中心に、博士論文の一部を開示するというものであった。特に印象に残ったのは、〈詩的精神〉が単なる「情緒的要素」とどまるものではなく「構成の原理」にも関わってくるという指摘と、それを踏まえるなら、「芸術その他」という8年前の文芸観と後期文芸観は決して分断されたものではないという認識の二点である。

まず前者に関しては、志賀直哉の「焚火」と芥川の「海のほとり」の詳細な比較から、志賀の「澄み切った」「気韻」やフローベールやボードレーが使う「色彩の統一」などのキーワードを導き出し、その上で、ポーが「構成の原理」で説く Totality of effect (効果あるいは印象の統一) と〈詩的精神〉が関わることを指摘する。これは谷崎潤一郎との論争において敵対概念のようになってしまった「構成」の再検討へも繋がる画期的な問題提起だろう。また、後者は、「文芸的な、余りに文芸的な」に記される「芸術家の面目」や「技巧」という語から文芸観の連続性を導いた。さらに「続文芸的な、余りに文芸的な」にある、「二二が四」的な数学的操作によるばかりでなく「直観」や「詩的精神」によっても「印象の統一」が為されるとの主張を、芥川のポーからの離陸と捉え、「十年前の僕」とクローチェを踏まえた「芸術その他」との違いであるとの見解を示した。ではなぜ芥川はことさらに「構成する力」への言及を避けたのかといえ、それが「自らを鞭打つ」ことになることを自覚していたからだ、と、「文芸的な」の草稿の削除部分を踏まえて推測し、その封印にこそ〈詩的精神〉の内実が隠されているとした。

今後の課題として、前衛芸術との早急な関連付けによって見落とされてしまった、〈心境小説〉を支える自然主義の文芸理念と芥川の文芸観とを再接続することを挙げられた。その課題には、芥川に限らず大正期の文芸思潮の見取り図を刷新するだけの可能性が含まれているように感じる。参加者からは、クローチェやドイツ自然主義の文芸観との関連や、「詩人兼ジャアナリスト」「よく見る目と感じやすい心」「東洋的詩的精神」について、学生等に伝えるべき面白さなど、それぞれのもつ関心事項と絡めての質問がなされた。博論の完成は長期スパンとなるが、氏はその間のご苦労や認識の変化、その対応など具体的な経緯も惜しみなく開示して下さった。それらを聞くことにより、研究領域が大いに開かれた感がある。

二番手、岸本恵実氏による「『奉教人の死』『きりしとほろ上人伝』の外来語表記」は、タイトルからも興味の弥益す言語学的なアプローチである。二作品の特徴として、「さんた・

るちや」「えけれしあ」等ひらがな音写を用いていること、漢語、漢字、ルビが付されていることを氏はまず挙げた。日本語史において、ひらがな音写が用いられたのが幕末頃まで、大正期にかけてはカタカナ表記が増えていたことを考えると、芥川表記の特異性が浮き出てくる。中点やカギ括弧の使用例から、芥川が倣った文献として、新村出の『南蛮記』(1915)のほか、木下杢太郎も上野図書館で参考にした『欄説弁惑』(盤水夜話、1799)の名が挙げられた。

次に、表音法として、「ろおれんぞ」や「れげんだ・おうれあ」(『傀儡師』)に見られる、「お」や「げ」へ注目する。この表記がキリシタン資料と合致しないため、「ロレンソ」「れげんだ・あうれや」に直すべきとの提案を新村から受けたことは既に知られているが、芥川がそれを採用しなかったことに独自性を見出す。また、キリシタン時代の用語や用字をそのまま使用するのではなく、「じやぼ」(悪魔)や「まるちり」(殉教)など大正期に使われた漢語(仏教用語の援用や近代以降の訳語)を補っているとの指摘があり、新鮮な驚きを覚えた。芥川が二作を書くにあたり、新村が引用したキリシタン版国字本に似せつつ、ひらがな音写を主に使用することで「古めかしさ」「南蛮風」を表現し、且つ、大正期一般の使用法や説明的な漢語(訳語)を追加することで読者の理解を促したと、氏は簡潔にまとめられた。

参加者からは、芥川蔵書にあるヤコブス『黄金伝説』(カクストン版)や聖書翻訳、明治期カトリック系聖人伝の文体等との関連について質疑がなされた。また、北原白秋や木下杢太郎たちの時代との閲覧可能な資料の差や、芥川の語の使い分け意識、韓国語翻訳の工夫と困難さ、英文に古典語を引用する方法としてポーの影響の有無など、言語表現への具体的な引用関係を問う質問がその後も続いた。今後の課題として挙げられた、個々の語の検討、草稿・他の切支丹物との比較等は、文学研究の立場にも必須だろう。一作家の語彙選択にとどまらず、日本語表記のスタンダードの生成という観点からも眺めてみたい問題意識となった。

三番手は、章瑋氏による「「絹帽子」と「「雛」草稿」の直筆資料から見えるもの」を副題とした「芥川龍之介 一九二一年の中国旅行と「奇遇」の虚実」である。「奇遇」は、中国旅行直前の大正10年3月19日に「間に合わせ」に書かれたとされてきた。が、実はそれは偽装であり、真実は別にあるという。直筆原稿の字体や書き込み、雑誌の出版状況などからそれを証し、なぜ偽装を行ったのかを考察するという刺激的な発表であった。

「「絹帽子」草稿」には、編集者の書き込みとして、中国渡航前、雑誌社からの仕事一切を断っていた芥川が、中央公論からの懇望を断れず、まず短篇「雛」に取り掛かったこと、「中途に只一箇所」不満が出たため筆が進まなくなったこと、代わりに多少の修整を加えればよい「絹帽子」を発表する旨が記されている。もう一つの草稿「雛」には、確かに「中央公論 小説四」の判が押されおり、「絹帽子」がそれと差し替えられたものであることは、「八十六頁ヨリ」のページ割が引き継がれていたことから解る。しかし、該当の『中央公論』(第36年4号)に「絹帽子」は発表されず、86頁には菊池寛「乱世」が繰り上げ掲載

され、芥川作品として創作欄最後に「奇遇」が掲載されている。ZOOMを前に、順を追って展開される読み解きには説得力があり、時間も疲れも忘れさせてくれた。

氏は、中国旅行出発までの芥川の行程を辿り、「奇遇」が汽車を途中下車した大阪で25日から3日間かけて書かれたものであること、「間に合わせ」の作品という〈偽装〉が、発表を断った他誌への配慮であったとの推測も示した。また、この時期の「芥川」を思わせる三人称の使い方を、「描写法に一新機軸を出さん」と結びつけた。発表後、留学生による直筆原稿の研究がまことに国際学会に相応しいとの称賛を皮切りに、〈新機軸〉の内実や〈偽装〉の逆効果の可能性が問われた。また、作家とジャーナリストによる人称の差異や「主人」という表記について、執筆時期確定となり得る平仮名「た」の書き分けなど表記への関心と共に、大阪毎日新聞日曜付録掲載の状況や菊池側からの証言の有無、当時の雑誌の発行状況との関わりなど作品外部の関心の強さが質疑には示された。それぞれに対する氏の明快な応答も記憶に残る。別のプレテキストの指摘や、中国への心構えを踏まえたテキスト分析の必要性、作品や作者をめぐる虚実の曖昧性なども問われたが、「奇遇」そのものの読みの今後の展開に期待を寄せたい。

〈偽装〉という言葉借りるなら、文学テキストや作家の言葉が濃淡深淺を問わず偽装を抱えたものであることは自明であろう。今回は、文芸思潮や表記、執筆、掲載状況といった外部から表現へ迫る研究が重なったが、虚実を踏まえたうえでの資料や言辞の選択という、研究者側の主体の精度を問い直すきっかけをいただいたように思う。会の最後に、高橋龍夫会長より、オンライン開催であることの恩恵、芥川文学の益々の多角的研究の可能性、そして、開催にあたってご苦労も多かった運営委員会への心よりの感謝が述べられた。十分な時間を確保しての研究発表、それでも尚足りなくなるほどの質疑応答の充実ぶりを実現する集会となったことを思い、会に携わったすべての方へ感謝申し上げたい。

芥川研究集会報告記

広島大学・フェレイロ、ダマソ

2021年3月13日（13時～17時）に国際芥川龍之介学会ISAS第2回研究集会に参加しました。この度、新型コロナウイルスの影響のためにZOOMを使用し、オンライン開催になりました。移動せず参加できるメリットもあり、今年度の参加者は数多くいらっしゃり、質疑応答時間の際に非常に盛り上がりました。

今回は個人発表が3つ予定され、明治大学兼任講師・落合修平氏の「芥川龍之介晩期文芸観の研究一意図・推論・全集の外一」で始まりました。本発表において落合氏が博士論文の成果をまとめ、さらにこのテーマの限界、今後の可能性も示しました。ご発表の内容は、まず、芥川の晩年文芸観において中心的な役割を果たす〈詩的精神〉、またその概念

のもたらす様々な問題、それらの問題を取り扱った先行研究を簡潔に紹介しました。その後、芥川の『『話』らしい話のない小説』の実作である「海のほとり」と芥川にとって『『話』らしい話のない小説』の代表作である、志賀直哉の「焚火」の比較を行い、晩期芥川の文芸観における志賀直哉の評価を確認しました。その結果、「気韻」、すなわち、ある作品の〈内的なリズム〉という概念が現れますが、落合氏はその据え難い語を定義するのに、和辻哲郎のいう「感情のリズム」と結び付けました。それだけではなく、この両作は全体として、「ぼんやりとした遅さ、あるいはすみやかな」、いわば〈内的リズム〉の他に、作品に効果をもたらす〈印象の統一〉という要素も共有しているというのが落合氏の主張でした。そうすると、芥川の〈詩的精神〉は、構成の原理になる仮説が成り立ちます。さらに、この〈詩的精神〉の由来にあたって、ベネデット・クローチェに遡る必要があります。落合氏が芥川の〈詩的精神〉とクローチェの思想の関係性について、また芥川と谷崎の間の「構成する力」について考察を加えました。発表が終わり、参加者にもご興味を持っていただき、落合氏は有益な質問やコメントを色々いただくことができました。例を挙げると、松本常彦氏から〈詩的精神〉と「構成する力」の関連性について、小谷瑛輔氏からは一般の読者が注目しない、芥川の小説の面白さがどこにあるのか、高橋龍夫氏から東洋の〈詩的精神〉と西洋のそれとどこが異なるのか、五島慶一氏から文芸論とアフォーリズムという形式はどのような関係のあるものなのか、等のご質問が上がりました。

二人目の発表者は、大阪大学准教授の岸本恵実氏でした。岸本氏のご発表は「『奉教人の死』『きりしとほろ上人伝』の外来語表記」という題であり、「奉教人の死」と「きりしとほろ上人伝」における外来語表記、特にひらがな音写に注目し、キリシタン版の『天草版平家物語』（1592）と『天草版伊曾保物語』（1593）が芥川の両作にどのような影響を与えたのかを中心に議論しました。岸本氏によれば、以上の二点のキリシタン版が新村出によって『南蛮記』（1915）と『文禄旧訳伊曾保物語』（1911）というタイトルで日本語に翻字され、芥川がそれらを読んだことが考えられるとのこと。先行研究の徹底的なご紹介の後、「奉教人の死」と「きりしとほろ上人伝」に現出する外来語表記を「固有名詞」と「普通名詞」に分類し、リストを作成しました。さらに、芥川の同時代の他作品と比較したところ、他作品においてカタカナ表記への転換が見られるにもかかわらず、「奉教人の死」と「きりしとほろ上人伝」は特異だということを示しました。新村の翻字と比べても、新村の両作も基本的に外来語をカタカナ表記にしているので、芥川作品は改めて特異だと言えるそうです。また、漢字ひらがなの混じり文での外来語はキリシタン時代以降が稀であること、「れげんだ・おうれあ」のような新村にしか見られないひらがな表記での外来語を考慮に入れると、芥川がこのような表記を新村に倣ったことが明瞭であると言えます。にもかかわらず、芥川の外来語表は統一しているとは言えず、一部は明治以前の資料によりつつ、もう一部は明治大正期に一般的な用法に合わせている、独自の外来語表記を採用したというのが、岸本氏の主張でした。また岸本氏への質問を簡潔にまとめると、小澤純氏から白秋や李太郎

と芥川の間差異はどこにあるのか、奥野久美子氏から芥川の切支丹物を執筆していた時にどれほど読者を意識していたのか、庄司達也氏から芥川が持っていた蔵書の中には *Legenda Aurea* が入っているが、そこに出る英語表記との関係はどうなっているかというようなお質問が上がりました。

最後の発表は筑波大学大学院生の章瑋氏で、ご発表の題目は「芥川龍之介 一九二一年の中国旅行と『奇遇』の虚実—『絹帽子』と『雛』草稿の直筆資料から見えるもの—」でした。本発表は芥川の未発表作品「絹帽子」、中国旅行直前の間に合わせの作品として認識されてきた「奇遇」と「奇遇」に至るまでの最初ステップだと思われる「雛」の間の関連性を中心に扱い、「絹帽子」を取り下げ、その代わりに「奇遇」を発表した芥川の狙いを検討したものです。章瑋氏はまず、「奇遇」の掲載経緯、作品内容及び作品の執筆月日、当時の作品評価、また作品の与えた影響を詳細に紹介した後、本発表の主題である「絹帽子」、芥川が書き上げるつもり「雛」と「奇遇」の三角関係を説明しました。章瑋氏は論点をはっきりとさせ、当時のさまざまな資料や芥川原稿に基づいて、対象作の共通点と相違点をわかりやすく整理しました。その後、「奇遇」が掲載されたと思われる、大正10年3月19日までの芥川状況や作品の掲載シナリオなどを分析した結果、本作を再考する必要性が生じてくることが明らかになりました。章瑋氏の発表に対して質問やコメントが数多く生じました。例を挙げれば、小澤純氏から、芥川作品の中で自分自身を描く三人称から中国旅行を経て一人称になった理由について、五島慶一氏から『中央公論』における菊池寛の重要性及び芥川作品への影響について、秦剛氏から当時の編集体制や印刷手順、また芥川の中国旅行直前の発熱エピソードの信憑性について、松尾清美氏から作品の中におけるジャーナリズムへの批判や矛盾に関して、堀竜一氏から「雛」の草稿において「彼」ではなく「主人」という形で現れる三人称の意義についてなど、様々なお質問が発生し、非常に充実した討論になりました。